

ブリリアント・クラウンを撃ちぬいて

作——浅井キヤビア

かあさんの部屋はからっぽのかおりがする。

いきつめの調剤薬局でもらったたくさんのお薬を手みやげにあたしはいつものようにこの部屋へとたどりつく。かあさんは窓際にずらりとそろえた空き瓶にささった花々の亡骸たちを、そつと慈むように細いゆびで撫でてゐる。ただいま、とあたしは言う。おかえり、とかあさんは言わない。ここはこの島の北端の岬で、窓の向こうにはくろぐるとした広い海がある。

「花がね」

「うん」

「わたしの好きな花はここでは枯れてしまうの。せつかく本土から取り寄せてもらったのに。潮の香りがつよすぎるのか土が悪いのかはわからないけれど」

「それじゃあ、——もう本土に帰ればいいんじゃない？」

使いざらしの硝子のコップの中で粉末のお薬を溶かしながらあたしはそう言った。ふいに湿り気をはらんだ風が海から押し寄せて、真つ白なカーテンが幽霊のようにひるがえる。

あのひとが笑う。しらちやけた流木のような、しずかな微笑。

「たくさんの恋をしてたくさんの罪から逃げて、そうしてわたしはこの島へとたどり着いたの。この脚はもううごかない。もうどこにも行けないわ」



夜が来て、おしごとの時間になった。

「だ、だだだだんつ、だだん、だだ、だだだだあんツ」

あいもかわらず男子たちは馬鹿ばかりだ。駐留軍のまぬけづらを映すためのカメラがアメリカのなんとか言う機関銃に似てると言い出したのは同じクラスの鋤原で、ぼつかつてめーぜんぜん似てねーよ銃の知識なさすぎだろ義勇軍やめろ、とまともなツツコミを入れた三組の酒々井もノリ気になってじゃれ合いをはじめ。柄倉はG Iのキャンプからギってきたらしいお酒を飲みながらメリケンの味覚おかしすぎだろもう国に帰れよと頂面でひとくさりぼやき、内ボケットからとりだした無線をあたしに投げてよこす。

「なんか着信あった。二三三〇の定時連絡じゃねえの」

あたしがつい無線機にむけて、ハイこちら神川です定時連絡どうぞーと乱暴な声で言うと、おかえしとばかりにノイズまみれの怒鳴りごえが返ってくる。標的に動きあり。襲撃準備。ほとんど何を言ってるのかわからなかつたけどそれだけ聞こえた。

「神川隊長。なんて？」

「町でおんなのこ漁ってた駐留軍のひとたち帰ってきたつて」

「うっそ。マジ！」鋤原が叫んだ。「やれんの！」

「たぶん。なんかよく聞こえなかつたけど」
おおはしやぎしながら鋤原と酒々井がスポーツバッグに爆竹をつめこんで丘の下の野営拠点へ走りさつていく。柄倉は律儀にもあたしにライフルを渡してから二人のあとに続く。あたしは標的を見おろす丘の上で一人きりになった。

実弾じゃなくて一ミリのペイントボールを撃ちだす、ふつう二〇も離れば誰も当てられなくなるキツネ狩りのおもちゃ。それを弾が届くギリギリの八〇から当ててみせた時にあたしの立ち位置は決まった。あの訓練で義勇軍のみんながあたしに一目おくようになった。それはどうでもいいけどもらえるお金が増えたのは嬉しい。何